

主日の福音 2025/12/14(No.1387)

待降節第3主日(マタイ 11:2-11)

御子を抱いた人は、ヨハネより偉大である



ご降誕までいよいよ十日となりました。今日の福音で「わたしにつまずかない人は幸いである」(11・6)とあります。イエス・キリストを受け入れる、信じることがあなたにとって生活のつまずきになっていませんか、もうすぐおいでになる救い主が私たちの生活の喜びの源でしょうか、と問いかけています。

また堅信式も1ヶ月ちょっととなりました。人数は下五島地区で13人です。ほとんどが福江教会の受堅者です。ほとんどが福江教会ということは、今年は他の小教区に対象者がいなかったということで、もしかすると今後も同じような傾向が続くかもしれません。イエス・キリストをクリスマスで喜んで受け入れた受堅者たちが、勇気を持って証しできる人になってくれることを願っています。

「わたしにつまずかない人は幸いである。」イエスにつまずく人もいます。どんなに「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」(11・5)と言われても、それを言葉にすることに抵抗がある人がいます。イエス・キリストはその人にとって生活の重荷、妨げになっているのです。

見えなかったことが、見えるようになる。ご降誕の夜半に話そうと思っていることをちょっとだけ告知しますが、イエス様の誕生がすべての人のためであるなら、すべての人が、新生児を受け取ることになります。結婚した人、独身の人、独身をささげた人。すべての人が子をいただくのです。この視点は、「見えなかったことが見えるようになる」と言えないでしょうか。

または、足の不自由な人が歩きます。足の不自由な人はたくさんいますが、その中には、どうしても、どんな苦勞をしてでも、ご降誕のミサにあずかりたいと思って、不自由な体で教会に来るのではないのでしょうか。それはつまり、足の不自由な人が歩く姿ではないのでしょうか。

全員が来ることが出来るわけではありません。実際、今年の初めからずっと悪性リンパ腫の抗がん剤治療を受けていた実家の母は、ご降誕のミサに参加できないかもしれません。しかし、それでもミサに行く、これが最後であってもミサに行くと言うならば、それは死者も同然の人が生き返ったのと同じではないのでしょうか。

すべての人を引き合いに出すことは出来ません。しかし、少なくとも中田神父は、今年、母親がたいへんな目に遭ったにもかかわらず、ご降誕を待つことは生活の支えであり、誰に対しても堂々と証しができる体験となりました。今年あった出来事は、私にとっても、家族にとっても、必ず通るべき道だったのだと思います。

皆さん自身、似たような体験をなさってきたのではないのでしょうか。今まで見えなかったことが、主日のミサ説教で見えるようになった。ま

たは結婚式、葬儀のミサ説教で見えるようになった。もしかしたら説教はつまらなくとも、ミサ全体を通して、見えなかったことが見えるようになった。そういうことが無かったでしょうか。

あるいはどうしても行きたくなかった場所に（それは教会かもしれないし、教会以外かもしれませんが）、「まさか」という人が来ていたとしたらどうでしょう？「何があってもあの人は教会に来ない。」そういう人が来ていたら、足の不自由な人が歩いてきたことと変わらないのではないのでしょうか。死んでいた人が生き返ったのと変わらないのではないのでしょうか。

おいでになる救い主イエス・キリストは、私たちにとって本当に私の生活を喜びに変えてくれるお方か、私の生活の重荷、足かせとなるお方か、どちらかです。それはあなたがいちばんよくご存じでしょう。あなたの心に正直に、イエス・キリストと向き合ってはいかがでしょうか。

今年は聖年であると同時に、終戦から 80 年です。長崎に一発の原子爆弾が投下され、浦上教会はその日のうちに主任司祭・助任司祭、おそらくお祝い日前にゆるしの秘跡に来ていた人々が一瞬で亡くなりました。長崎市全体でも 24 万人のうち 7 万 4 千人が亡くなったとされています。

この状況で浦上教会の信徒たちは、「信仰も何もあったものか」と考えたのでしょうか。むしろ、一日も早く仮の聖堂を建て、ミサを始めたいと動き出したのです。浦上天主堂ががれきと化した時から二年間、主任司祭を務めたのは中田藤太郎神父様でした。

詳しいことはこの本に書かれています。どうぞ手に取って、お読みください。キリスト者にとって、おいでになるイエス・キリストは喜ぶのか、つまずきなのか。がれきの街と化した浦上の信徒たちの信仰表明が、この本には書かれています。

古い体験ですが、私は神学校の中学生時代に毎年 2 月 5 日に行われていた二十六聖人ミサの説教で「このような説教をする司祭になりたいものだ」と心震わせたことがありました。この話は何度か皆さんも聞いたことがあると思います。

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。

（中略）しなやかな服を着た人か。（中略）では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。」二十六聖人を「預言者以上の者」と表現して、寒さに震え、早く帰りたいと心の中で説教師を恨めしく思っていた少年に火を付けてくれたのでした。

俯いて説教は聞いていたので誰なのか知りもしませんでした。初めての助任司祭が浦上教会になった時、「君が司祭に本気でなろうと思ったきっかけは何か」と聞かれ、「二十六聖人ミサで、『あなたがたは、何を見にここへ来たのか』と説教した神父様に憧れたからです」と答えると、「その説教をしたのはわしだ。よく司祭になってくれた」と喜んでくれたのを今でも忘れません。どこから切り取っても、どの時間で切り取っても、救い主の誕生は中田神父にとっては生きる喜びです。